



Title	フローベール作品の生成と構造
Author(s)	金崎, 春幸
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/53767">https://hdl.handle.net/11094/53767</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【25】

氏 名	金 崎 春 幸
博士の専攻分野の名称	博 士（文学）
学 位 記 番 号	第 2 5 7 6 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	フローベール作品の生成と構造
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 和田 章男 (副査) 教 授 森岡 裕一 京都市立芸術大学教授 柏木加代子 准教授 山上 浩嗣

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フローベールの小説作品を、テキストの生成過程と作品構造の両面から分析し、その特徴を明らかにすることを目的としている。全体は二つの部に分かれ、第Ⅰ部はテキストの表層からのアプローチであり、生前に刊行された作品を中心にその構造や形式を明らかにする。第Ⅱ部では、いわばテキストの深層に分け入り、作家が参照した原資料や草稿を調査しながら、フローベールの文学創造の根底にあるものを浮かび上げさせようとするものである。5章から成る第Ⅰ部、6章から成る第Ⅱ部、および結論から構成され、A4判273頁、四百字詰原稿用紙に換算して約820枚となる。

第Ⅰ部では、フローベールの小説を刊行された順に『ボヴァリー夫人』（1857）、『サラムボー』（1862）、『感情教育』（1869）、『聖アントワヌの誘惑』（1874）、『三つの物語』（1877）を章ごとに論じている。同じモチーフの繰り返しや類似のモチーフとの関連を手掛かりとしつつ、隠された作品構造の解明を目指している。

『ボヴァリー夫人』を対象とする第1章では、鏡のモチーフに分析し、実像と虚像というテーマを導きだす。このテーマは論文全体に及ぶ射程を持ち、序論としての機能を併せ持つ。第2章で考察される歴史小説『サラムボー』の原資料はポリュビオスの『歴史』であるが、カルタゴの傭兵反乱の期間が歴史上と小説上で異なることに着目し、様々な時間指標の分析を通じて、小説独自の時間リズムを明らかにし、そこに宗教的・神話的時間の介入を見る。第3章では同時代を背景とする現代小説『感情教育』を扱い、1840年代のパリという現実空間に基づきながらも、「箱」の開閉のイメージを喚起する物語空間が形作られていると論じる。第4章では『聖アントワヌの誘惑』に関して、異なる時期に執筆された3つの稿の空間構造の変遷を中心に分析し、ブリュゲルの絵に触発された舞台空間が徐々に崩壊し、語り手の存在を持つ多様な小説空間への変化を明らかにしている。第5章で考察される『三つの物語』については、時代や背景が異なりながらも、「白馬」や「輝く目」などのモチーフ

の分析によって、ヨハネ黙示録のキリスト降臨のテーマのもとに作品全体がシンメトリックな構造を成していることが明らかにされる。

第Ⅱ部では、宗教のテーマを中心にして、下書き草稿や作家が参照した原資料の調査・分析がなされている。第1章では主に『聖ジュリヤン伝』と『ボヴァリー夫人』におけるルーアン大聖堂にかかわる場面を対象としながら、キリスト教的要素の中に異教的要素が混淆してくる過程を分析する。このような諸宗教混淆（サンクレティズム）は、2章～4章の『聖アントワヌの誘惑』の生成過程分析の中心テーマとなる。オフィス派が崇拝する蛇、アポロニウス、アドニスなどの異教的存在に、キリストのイメージが重なっていく過程が綿密に分析される。第5章では、『聖アントワヌの誘惑』の最終稿から削除された「近代都市におけるイエス・キリストの死」という挿話の生成過程を分析しつつ、最終稿に現れる太陽崇拝とキリストとの融合をフローベールのサンクレティズムの傾向を表す一要素として位置付ける。第6章では「糞」と「堆肥」という宗教とは対照的なテーマを扱いながらも、あらゆるものを呑み込みつつ創造へと転化させていくフローベールの文学創造の本質を論じ、創作過程に訪れる「天啓」に着目することによって、作家の執筆の仕方を「職人的エクリチュール」というよりも「宗教家的エクリチュール」とみなしうると結論づける。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の第Ⅰ部は、フローベールの完成作5篇の小説を対象として、繰り返し現れるモチーフ、テーマに着目しながら、特に時間的・空間的要素を綿密に分析し、各作品の隠れた構造を明らかにしている。時間・空間の様々な指標、人物・事物・風景の描写、人称代名詞の独自の使用法などテキスト上の細部への着眼は極めて独創的であり、その分析は綿密かつ説得的である。『サラムボー』の時間構造のリズムや規則性の中に見られる神話的意味、『感情教育』における作中人物と閉じた空間との関係性からの物語構築、『聖アントワヌの誘惑』の空間構造の分析に基づく舞台空間から小説空間への移行過程、ヨハネの黙示録を背景とする『三つの物語』のシンメトリックな構造の分析など、どれも秀逸な論となっている。

第Ⅱ部は主に宗教のテーマのもとに、草稿資料に基づくテキストの生成過程が考察されている。フランス国立図書館に所蔵されている『聖アントワヌの誘惑』の草稿のうち本テーマに関連する箇所に関して、草稿の分類、執筆順の確定、年代設定などが正確に行われており、このような基礎的作業はフローベール草稿研究に大きく貢献するものである。また、草稿からの引用はすべてディプロマティック型転写（再現型の転写）によるもので、正確さについても信頼に値する。歴史的資料の読書ノートから始まり、加筆部分に作家独自のヴィジョンや虚構が加わっていく過程が綿密かつ適確に跡付けられ、キリスト教と異教を混淆させていこうとする作家の意図が生成過程の分析によって明瞭となった意義は大きい。

第Ⅰ部第1章『ボヴァリー夫人』論の「鏡」のモチーフ、第Ⅱ部の「糞」と「堆肥」のモチーフはやや特殊に見えるが、前者は実像と虚像というテーマを導き出すことによって、論文全体に通じる導入部の役割を果たし、後者はフローベール美学の本質に関する結論部となっている。第Ⅰ部の構造分析と第Ⅱ部の生成研究は、方法論上の相違があり、論文全体の統

一性をやや損なっていることは否めないが、テキストの表層と深層という両面からのアプローチによってフローペール作品の特質を見事に浮き彫りにしていることは確かである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。